

# 商業の生成

小松 勇 吉

- I 生産物交換の発生
- II 商品交換の形成
- III 商品流通の展開
- IV 商業の生成

## I 生産物交換の発生

人間は、自らの諸欲望を満たすために物質的財貨（生産物）を消費しなければならないが、消費の対象物である生産物は、人間が自然を変革し改造して作り出すという生産によってはじめて獲得することができる。このように、人間と自然とのあいだの物質代謝を可能とさせる過程である生産は、社会発展と社会形態がどのようなものであろうとも、人間の存続にとって絶対的に充足させなければならない必要不可欠な前提であり条件である。したがって、生産は、人間が生誕し物質的生活を営んで以来欠かすことも中断することもできない・絶えず繰り返される第1の歴史的行為であり、人間にとって歴史貫通的な基礎的条件であり、したがってまた、それは物質的生活そのものの生産を意味する。

生産が窮極の目的とするところは消費であって、生産が出発点であるならば、消費は終結点であり、両者は相互関係のなかにある。だが、両者が関連しあうには、生産物が生産部面から消費部面にまで転換することが必要である。それには、生産から消費までの生産物の転換過程または行為、あるいは、生産と消費とを結びつけ両者を媒介する過程または行為が必要である。この必要不可欠な過程または行為が交換である。

交換は、総じていえば、人間の諸活動の相互交換であるから、人間と人間とのあいだに社会的諸関係が結ばれるによってはじめて生じる。交換は、直接的に現れる場合と生産物の交換という形態をとって現れる場合とがある。ここでは、交換を生

産物の交換の形態をとる人間の諸活動の相互交換である、と規定すると、交換は、社会的労働の変換の過程あるいは社会的質料変換の過程である。

以上のことは、社会の生産様式がどのような形態であっても、交換は存在しなければならない必要不可欠な過程または行為であり、さらには、絶えず繰り返して行われる消費とそれに対応して絶えず反復される生産とのあいだの媒介項である交換もまた、それらに対応して絶えず繰り返し反復されなければならないことを示している。

だが、それが真実であるからといって、社会が形成され発展するもっとも初期の段階から、交換が行われたということ、それは意味するものではない。交換が発生し発展するためには、一定の前提の存在とその発展が必要であって、それは、生産とその発展である。したがって、交換は、基本的に、そのすべての契機において、生産によって規定され、<sup>(1)</sup>また、交換の内包と外延、仕方、集約性、普及および形態は、生産の発展と組織とによって規定される。<sup>(2)</sup>それゆえ、交換の発生と発展について考察する場合、生産との関連において、これを行うことがなによりも肝要である。

社会の初期的発展段階のもとでは、人間のもっとも最初の生活形態は原始共同体であるが、その内部では、生産技術は未発達であり、共同体の紐帯のなかに閉じ込められた成員の需要をようやく充足させるだけの生産力しか所有せず、また、生産者と消費者との人格的統一という自給自足経済が営まれている。ここでは、そこで生産された生産物はそのままそこでまったく消費されるから、

生産物は生産部面から消費部面に転換されるほどの余裕はなく、したがって転換の必要性は生じることがなく、儀礼および贈り物の場合を除いて、交換が生じることはない。

ところが、共同体のあいだで、個々の共同体がその内部で、各種の生産物の生産に専門化するという社会的分業が、性別・年齢別といった生理学的基礎による分業ではなく、1家族の内部さらに発展しては種族の内部において自然発生的に行われるようになる。このことは、共同体のあいだで、ある生産物の生産者は他の生産物の消費者とならざるをえなくするものであって、生産者が同時に消費者であるというままの両者の人格的統一が分裂して、生産と消費とが部分的に分離する。それとともに、社会的分業は、その発展の結果として、生産性を上昇させ生産量を増加させ、自らの需要を越える余剰生産物を生産することを可能とさせる。この場合、自らの余剰は、自己にとって不必要な生産物であり、他の余剰は自己にとって必要な生産物となる。

ここにおいて、共同体は、それらのあいだで、社会的に質料を変換させることが必要となり、生産と消費との分離に対応して、両者のあいだを結びつけ媒介する必要性が生じる。その結果、各共同体は、自らの余剰生産物を他の共同体の余剰生産物と交換するという必要性に必然的に迫られる。

かくして、共同体内部での余剰生産物の生産と蓄積とが前提となって、余剰生産物の交換という実質的内容をもつ交換が共同体のあいだではじめて発生し、展開されることになる。この場合の交換がとる形態は、自己にとって不必要な生産物を相手方に提供し、その代償として相手方から自己にとって必要な生産物を直接獲得する<sup>(3)</sup>直接的な生産物交換である。この交換は、諸共同体の終わるところで、諸共同体が外の諸共同体、あるいはその諸成員と接触する地点で始まる。<sup>(4)</sup>

ここで留意しなければならないことは、つぎの点である。自己の直接消費する部分を超過する余剰生産物を生産しうる状態にまで社会の生産力が高まれば、社会の生産様式のいかにかわからず、交換は行うことができ、また、事実、歴史のもっとも早い時期から交換が行われえたことは確かである。だが、始源的にみて、交換がはじめて発生し展開されるようになるのは、さきにも明らかな

ように、共同体内部での各個人のあいだではなくて、共同体の外部との接触を機縁として、共同体と共同体とのあいだである。というのは、第1に、共同体の内部では、共有する生産手段を用いての共同生産が原則であり、したがって生産物の所有もまた共同であることが特質であるからであり、第2に、共同体内部の成員は共同体の紐帯のなかに固く閉じ込められ結びつけられていて、相互に独立の人格、私的所有者として対応することができない一方、そこでは生産物は必要におうじて平等に分配されるから、共同体内部では、個人のあいだに交換の必要性が生じなかったからである。

かくして、集団的生産と生産物の直接的分配が支配する共同体のあいだで、異なる自然的環境のもとで異なる生産様式と生産技術、異なる生産手段と異なる生活手段、したがって異なる生産物を共同生産し共同所有する共同体のあいだで、交換がはじめて行われるようになる。だが、注意すべきことは、交換発生の当初にあっては、生産はなお使用価値の生産にとどまり、したがって、発生当初の交換は、すでに明らかなように、余剰となった使用価値の交換である、ということである。始源的な交換は、直接的な生産物交換であり、交換される財貨にかんして、より正確にいうならば、使用価値をもつ生産物の余剰の直接的交換であり、あるいは、生産物の物々交換であって、それは、もっとも古い・始源的形態の交換である。共同体内部における余剰生産物の発生と共同体のあいだの直接的な生産物交換は、やがて、共同体内部において分業関係を促進し、ついで、支配・従属の関係を創出するにいたる。

ここで、直接的な生産物交換の特徴を列挙しよう。第1に、交換に出されるものは、もともと生産者自身の欲望充足・消費のために生産された生産物、使用価値を目的に生産された単なる生産物であって、しかもその余剰であること、第2に、交換されるどの生産物も、その生産者にとっては非使用価値でありかつ直接に交換手段であり、非生産者にとっては使用価値であり、かつそうであるかぎり、等価物として評価されるものであること、第3に、当初においては、交換そのものは必ずしも成立しうるわけではなく、また、不規則性、偶然性、例外性という性格をもっているということ、第4に、この交換形態は、時間的、場所的、

個人的制約がつねにつきまとうという制約性をもっているということ。

これらの諸特徴についてより詳しく考察しよう。

第1の特徴について。交換される生産物は、たまたま交換に出される単なる生産物の余剰であって、本来的な商品ではない。商品とは、生産者自身の欲望を満たすものではなく、非生産者の欲望を満たす生産物、人間の欲望を満足させ他の生産物と交換される生産物、交換にはいる生産物である。つまり、商品は使用価値と交換価値（価値）との統一物である。だが、ここでは、単に使用価値をもつ余剰生産物が交換に出されたにすぎず、交換に出されることによってはじめて商品となったのであって、交換に出されることをはじめから目的に生産された商品ではない。したがって、始源的な交換は、単に使用価値を目的に生産された単なる生産物の余剰の交換としての現れ、かかるものとしての性格をもつ形態である。それゆえ、交換は、この段階では、いまだ生産全体をとらえるにいたっていないし、またそれを規定する存在とはなっていない。

第2の特徴について。交換される生産物は、生産者にとっては非使用価値であり、生産と消費の分離に起因して相互に必要とされる使用価値そのものであるが、それ自身の使用価値および交換当事者の個人的欲望から独立した価値形態をいまだ客観的には受けとっていない。

第3の特徴について。生産者の側に余剰生産物が存在し蓄積され、非生産者の側にその入手に利益を見出すことが交換成立の必要条件であるから、生産物が使用価値をもっていないか、それと交換するための他の使用価値が他方ない場合は、交換が成立しないことは、いうまでもない。また、生産物の余剰がはたして交換されるかどうかはわからないし、どの生産物も他のどの生産物と必ず交換されるということはなく、さらには、交換当事者の自己需要を越えての余剰生産物が量的に不足する、などの場合には、不規則性、偶然性、例外性という性格が顕著に交換につねにつきまとう。

第4の特徴について。この交換形態は、同一時点、同一地点において同一当事者によって行われる直接的な生産物獲得を表すものであるから、時間的、場所的、個人的制限という制約性をもたざるをえないし、また、一時的な・それだけで孤立

的に存在する・それだけで完了してしまう・封鎖的な形態をとらざるをえない。

社会的分業の発展と生産技術の改良とそれにもとづく生産力の発展は、個別的な生産物需要に比較しての余剰生産物の数量とその種類の増加をもたらすが、それは、生産物にたいする欲望をいっそう刺激しそれを高めずにはおこなくなり、よりいっそう多くの交換を求める。ここで重要なことは、生産物交換がよりいっそう繰り返し行われるなかで、生産物は、もともと有する使用価値のほかに、交換当事者にとって交換価値を新たに付与されることになり、その反復によって、生産物は価値を具現するものとなる、ということである。というのは、交換価値は交換を離れては価値ではなく、交換によってはじめて価値として実証されるものであるからである。

生産物に交換価値が新たに付与されるということは、第1に、商品が必ず具備すべき2要件（使用価値と価値）がここにおいて整い、生産物が商品に必然的に転化する要因がここではじめて形成されること、第2に、2要件を具備した商品はすべて交換にはいなければならないこと、第3に、社会的生産過程がその全体的な広さ、深さにおいて、交換価値によって支配される事態がやがて将来する要因がここではじめて形成される、ことを意味する。

だが、ここではさしあたり、生産物への交換価値の付与について過程的に考察するならば、それは、より高度の社会的分業を促進する起因となるとともに、その結果として、より多くの生産物が生産される要因ともなる。それだけではない。生産物への交換価値の付与は、自己の生産物の余剰によって他の諸欲望を満足させる他の使用価値をより多く獲得することができることを意味するから、その結果、他人の所有になる諸使用価値にたいする欲求がしだいに交換の必要性をよりいっそう高めることになり、交換を繰り返し行うことがよりいっそう欲求されるようになる。

かくして、余剰生産物のいっそうの出現とその繰り返し反復される交換は、自らを規則的に展開させ、それを1つの規則正しい社会的過程とさせるとともに、その社会的過程の進行のなかで交換価値を生産物に付与し単なる生産物を必然的に商品化させる。総じていえば、直接的な生産物交換

の暫時的拡大、交換にはいつてくる生産物の数量の増大と種類の多様化は、生産物を交換価値として発展させ、単なる生産物を商品に転化させるにいたる。換言すると、生産物交換は、その内部においてはじめて、感覚的に違った使用対象性から分離された社会的に同等な価値対象を生産物に受け取らせ、生産物を単なる使用の対象からはじめて交換の対象となる商品に、生産物を使用価値と価値との統一物としての商品に転化させる、あるいは、生産物交換は、生産物を単に使用価値をもつものから社会的・経済的概念としての商品に転化させる、ということが出来る。

生産物が商品として現れる、あるいは、価値と使用価値との統一物としての商品が成立するのは、直接的な生産物交換においてはじめて始まる使用価値と交換価値との分離がすでに成し遂げられるほどまでに社会的分業が発展していること、この交換がすでに十分な広がり重要性とをもつようになったという背景が形成されたからである。しかして、これらのことは、生産物生産という生産形態にも、それを発展した他の生産形態に変換させるという、大きな影響をあたえるばかりでなく、直接的な生産物交換そのものにも破壊的・分解的な作用をおよぼさないわけにはいかない。

それだけではない。もともと生産物の商品への転化は、別々の共同体のあいだの生産物交換がはじめて生じさせたが、この対外的共同生活における生産物交換は、生産物をいっそう規則的に商品に転化させることを促し、自給自足経済を解体させるとともに、他方で、共同体内部にも大きな影響をおよぼす。それは、共同体の外部で始められた交換が反射的に共同体の内部に持ち込まれて、共同体の内部的な生活においても生産物を商品化させ、生産物生産を商品生産化させることである。このことは、共同生産と共同所有を基礎に成立していた共同体の内部においても、成員は共同体の紐帯から解放されて、共同労働から個別化された私的労働の独立化を生みだし、生産手段と労働生産物の私的所有制の出現とその発展を促す。

だが、私的所有制のもとでは、私的労働は自らが社会的労働でありその1分枝であるという実を示さなければならないが、それは、私的交換の過程での生産物の譲渡によってのみ可能である。換言すると、私的所有制のもとでの商品生産の基礎

のうえでは、私的労働は、生産物の全面的譲渡によってはじめて社会的労働となる。それゆえ、私的労働が社会的労働の1分枝としての存在であるという実を示すために、私的労働を担う個人のあいだで私的交換が行われる必然性が生じる。

## II 商品交換の形成

私的所有制のもとでの社会的分業の発展は、生産と消費との分離をより拡大するだけではなく、それにつれて、他の生産物の獲得にたいする欲求をより増大させて、生産物交換のよりいっそうの拡大を必要とし、やがて、他の種類の生産物と交換することを目的として、個別化された独立の私的労働によって生産される生産物としての商品を生産させる。

以上の事情は、私的生産者のあいだでそれぞれの生産物にたいする相互依存関係をますます増大させる要因をつくり出す。だが、この増大化する相互依存を充足させるためには、余剰生産物だけが商品に転化した生産形態では不十分なことは明らかである。それゆえ、生産物生産という形態を止揚し、それに代わる生産形態として、直接に交換だけを目的とする商品生産への変換が必然化し、商品生産が生産形態として一般化する。

とはいえ、商品生産が開始される当初においては、すべての単なる生産物が一時に商品に転化されるわけではない。当初では、生産物の商品への転化はなお個々の点で起こるだけであって、生産の余剰あるいは個々の生産部面（マニファクチュア生産物）などだけにおよぶにすぎず、生産物が全範囲にわたって取引物として交換過程にはいることもなければ、また全面的にこのようなものとしてそこから出てくることもない。一方で単なる生産物が存在し生産物生産が行われるとともに、他方で商品が出現し商品生産が行われるにすぎない。

しかし、広範囲にわたって、反復される交換が生産物に交換価値を付与するにつれて、すべての生産部面において生産物から商品への転化が起こり、単なる生産物と商品とのあいだの明確な分離が確立されて、生産形態においても、生産物生産に代わって商品生産がしだいに支配的な形態となり、やがて生産は全範囲にわたって、その深さと広さにおいて完全に商品生産となり、すべての

生産物が商品に転化するという点については、留意しなければならない。

商品生産は、生産物生産と決定的に相違する。生産物生産が生産者の自己労働にもとづいて直接的生活手段として生産物を生産し、かつ、その生産物の余剰だけを商品に転化させた。これにたいして、商品生産は、生産物を生産者自身の直接的自己需要の充足手段として生産するのではなくて、もっぱら直接に交換を目的に行われる生産形態であり、それは、もっぱら他人労働に依拠する需要充足の生産形態であり、したがって社会的性格がきわめて濃厚な生産形態である。

しかし、いま、商品生産を生産者の相互依存関係の観点から考察すると、商品生産は、生産者が自己の生産物によって他人の欲望を充足し、また他人の生産物によって自己の欲望を充足することを目的に、一定種類の商品を恒常的に生産することである。したがってまた、商品生産が行われるための前提を考察すると、社会的分業のある程度の発展、生産手段の私有を中心とする私的所有制の確立、社会的労働の1分枝としての私的労働の独立、の3点をあげなければならない。

すでに明らかなように、生産物は、その余剰が交換に出されることによってはじめて商品に転化した。生産物は、かくして、交換以前には商品ではなかったが、交換によってはじめて商品となった<sup>(5)</sup>わけである。商品発生はこの始源を基盤にして、生産形態は、生産物生産からはじめから交換を目的とした商品生産に転換されるようになり、その瞬間から、一方では、直接的要求にたいする諸物の有用性と交換のための諸物の有用性ととのあいだの分離が確立される。他方では、それらの物が交換されあう量的関係は、それらの生産そのものに依存するようになるが、<sup>(6)</sup>その意味することは、1つの使用価値が他の使用価値と交換される量的関係は時と所により変動するが、既述のように、生産物は相互の交換により1つの交換価値を表し、その反復により1つの価値を具現するようになることである。<sup>(7)</sup>

したがって、生産物が商品に転化するための、あるいは、商品生産が行われるための条件は、社会的使用価値が生産され、しかも生産者の自己需要を量的に上回って生産されることが必要であり、さらには、生産者にとって不必要な生産物が消費

者から使用価値として認知されることが必要である。あるいはまた、生産物の商品化のためには、直接的な生産物交換において始まる使用価値と交換価値との分離がすでに完成されているほどまでに発展した社会的分業が基礎的条件である。

ところで、直接的な生産物交換のもとでは、生産の大部分は、生産者自身かその周辺の生産者たちの欲望の充足に向けられる。だが、商品生産が発展すると、それが、余剰生産物だけを商品に転化させる生産形態に破壊的・分解的に作用して、それをしだいに駆逐して、自らが支配的な生産形態となり一般化する。この段階では、生産者は自己の私的労働の生産物が満たしうる自己の欲望の部分はきわめて小部分となり、他人の私的労働の生産物によって自己の欲望の大部分が満たされなければならない。かくして、私的所有制の確立と社会的分業の発展によって社会の生産力が増大するなかで、社会的質料の変換の必要性がより高まるとともに、交換にはいりこむ商品の数量と種類とが増加して、社会の諸欲望の充足が交換に依存する度合いがますます大きくなる。

それだけではない。商品が商品として成立した以上、その内部には使用価値と価値とのあいだの矛盾がすでに含まれている。このことから、すべての商品は、交換に出されなければならないことになる。というのは、この矛盾は、交換をつうじて、かつ、交換をつうじてのみの商品の使用価値と価値との実現によってはじめて解決される性質のものであるからである。

ここにおいて、個々の私的生産者のあいだで行われる交換が生産全体をとらえ、それを規定する存在となる。このことはまた、交換が広範囲に展開されること自体をその社会が成立し維持するうえで不可欠な条件とさせるだけでなく、広範囲に展開される交換そのものを個々の私的生産者がそこに組み込まれざるをえないような社会的過程とさせる。

ところが、直接的な生産物交換の形態は、すでに指摘したように、不規則性、偶然性、例外性という性格をもっている。この交換形態は、それに加えて、一時的な・それだけで完了してしまう・それだけでは自らの活動範囲を拡大することができない封鎖的な交換形態であり、他の交換とは関連なく存在しうる・他の交換の存在を必要としな

い存在であると同時に、時間的、場所的、個人的制限をもっている。そうである以上、商品生産が広く進行する結果、交換がますます必然的に、全面的に、広範囲に、規則的に展開されることが社会的過程として要請されるもとにあっては、直接的な生産物交換の形態は、生産力の増大と交換にはいる商品の数量の増加と種類の多様化に起因して、より頻繁に行われることが社会的に要請される交換の形態としては不照応・不適當なものとならざるをえない。それだけではない。直接的な生産物交換の形態は、生産力のいっそうの発展とそれに照応すべきことが社会的要請となる交換の全面的発展をかえって妨害する存在ともなり、<sup>(8)</sup>さらには、交換が生産全体をとらえるようになり規定するものとなること、つまり、商品交換が商品生産の社会的連関の唯一の存立形態となることから、直接的な生産物交換の形態は、商品生産の発展を阻害することにもなる。これが、商品生産の形成とその展開を前提にして、交換形態が直接的な生産物交換から商品交換に転換する根本的原因である、ということが出来る。

商品交換は、生産物交換とは基本的に異なる性質をもっている。それは、商品がいつでも交換されうるためには使用価値と価値との二重の存在様式をもたなければならないという商品の二重的性格、しかも、社会的連関のなかにあるとはいえ、どのような社会的生産関係をも表現しない使用価値と、他の商品との交わりにおいてはじめて獲得され、かくして社会的生産関係だけを表現する価値という、商品に現れる二重的性格に関連して必然的に生じることがらである。以下では、商品交換をめぐって、つぎの2点について考察する。

第1点は、商品の性格と商品交換との関係、商品とその交換当事者との関係である。商品交換の当事者を観察すると、まず、使用価値の観点からは、商品と生産者および非生産者との関係では、商品は、特殊の欲望の対象であるような人にだけ使用価値として譲渡されえ、したがって特殊な欲望との連関のなかでだけ交換されうるにすぎないから、生産者にとっては非使用価値、非生産者にとっては使用価値である。そうであるかぎり、すべての商品は全面的にその持ち手を交替しなければならない。したがって、商品交換は、異なる使用価値の持ち手交換という側面をもつ。

つぎに、価値の観点からは、商品の価値は、商品交換において相互に関連づけられて、生産者から非生産者に移転して実現されなければならない。したがって、商品交換は、価値実現という側面をもつ。それゆえ、商品交換は、一面、使用価値的には、その持ち手交替、他面、価値的には、その実現という二重的性格をもつ。

第2点は、商品交換における商品の価値と使用価値との相互依存関係、価値の実現と使用価値の実現との関係である。商品は、自己を使用価値として実現しうるまえに、まず自己を価値として実現しなければならない。他方では、商品は、自己を価値として実現しうるまえに、自己が使用価値として生産され、自己が使用価値であることを実証し、その有用性が社会的に認知されなければならない。それは、商品交換のなかで、それによっではじめて証明されうるものである。だが、すべての生産者は、自己の欲望を充足させる使用価値をもつ商品を商品交換において見出し、それと引き換えでなければ、自己の商品を引き渡さないであろうことは、確かである。

商品交換の二重的性格は、うえの考察から明らかになる。すなわち、商品交換の過程は、使用価値に即していえば、生産者の「個人的な過程」<sup>(9)</sup>である。他方、生産者は、自己の商品が他の生産者にとって使用価値であるかどうかにかかわらず、価値的には、他の商品が自己の商品と同じ価値をもち、しかも自己の気にいったものであるかぎり、自己の商品と他の商品との交換を行い、それをつうじて自己の商品の価値を実現しようとする。したがって、商品交換の過程は、価値に即していえば、「一般的・社会的な過程」<sup>(10)</sup>である。それゆえ、商品交換は、一面では、使用価値的には「個別的な過程」、他面では、価値的には「一般的・社会的な過程」という二重的性格をもつ。

以上の2点についての考察を総括すると、つぎのようになろう。商品の使用価値は商品の交換価値(価値)の前提であるという法則のもとで、交換される商品は価値として実現されることによつてのみ、使用価値として生成しうるが、他方、商品は交換での譲渡において使用価値としての実現を示すことによつてのみ、価値として実現される。このような商品自体の内部における2側面の相互依存関係にもとづいて、商品交換は、一面で

は、使用価値の持ち手交替としての使用価値的な「個人的な過程」と、他面では、価値実現としての「一般的・社会的な過程」という二重的側面をもつ、といわなければならない。

だが、このことは、同時に、商品交換の過程が、すべての生産者にとって同じ過程が個別的であると同時に一般的・社会的であるという対立し矛盾する2側面として現れることを意味する。しかしながら、同じ過程が個人的であると同時に社会的であることができない<sup>(11)</sup>ことは、いうまでもなく、それは、交換の矛盾として現象する。

商品交換がその使用価値的側面と価値的側面とのあいだに交換の矛盾を必然的に発生させ展開させる要因を自ずからもっていることは、以上のとおりである。だが、それとともに、商品交換は、交換の矛盾を必然的に展開させるなかで、交換の矛盾を自ら克服するのみならず、自らを全面的に発展させようとする要因そのものをもそれ自体のなかから生み出す能力と機構をもっている。

交換の矛盾の克服要因の発生機構は、交換当事者のあいだで規則的な商品交換が反復して行われる過程自体のなかにある。そこでは、交換される諸商品のなかから特殊な商品すなわち貨幣が、交換当事者の自然発生的な社会的行為の結果として選出される。それは、交換の矛盾を克服し交換を容易にするものとして現れるが、同時に、すべての商品にたいして一般的等価物としての特殊な社会的機能を独占的にもつ・一般的等価物として社会的に妥当な等価形態である特殊な商品である。それゆえ、貨幣は、すべての商品の交換価値の十全な定在を表す特殊な商品、特殊的排他的な1商品としての諸商品の交換価値であり、純粋に社会的な性質をもつ・交換価値の自立的形態である。

かくして、交換の矛盾がその必然的展開のなかで自らを克服するために必然的に生み出した産物としての貨幣が出現することによって、交換は販売と購買とに分離し、そのことによって、商品所有者は販売によって商品の価値を実現することができ、購買によってどのような使用価値をも獲得することができる。それだけではなくて、直接的な交換がもっている時間的、場所的、個人的制限を打ち破ることができる。

貨幣の出現によって、交換形態は、直接的な交換W-Wから貨幣を媒介とする交換W-G-Wに

不可避的に転換する。この交換過程は、商品から貨幣への転化すなわち商品の販売W-Gと、貨幣から商品への再転化すなわち商品の購買G-Wとの統一となって現れるものであるが、過程的にいえば、それは、交換過程が販売と購買とに分裂することを示すことは、すでに述べたとおりである。

このことは、交換過程の使用価値的・個人的側面と価値的・社会的側面とのあいだの対立ないし矛盾が、交換を分割することによって交換を容易にした貨幣<sup>(12)</sup>の出現によって、こんどは、交換過程が販売と購買への分裂、しかも時間的、場所的、個人的に分離される販売と購買への分裂という新たな対立ないし矛盾に必然的に展開することを意味する。とはいえ、さしあたり、自己の生産物を交換のために引き渡すこととそれと引き換えに他人の生産物を受け取ることとの直接的な同一性を分裂させた販売と購買との分離は、交換の全面的展開を可能とさせることは、確かである。

貨幣を媒介とする交換の基本的性格は、直接的交換のそれとは形式的にも本質的にも異質のものである。つぎに、それを明らかにする。

直接的な交換はW-Wという1つの過程によって行われる。これにたいして、貨幣を媒介とする交換W-G-Wは、商品の貨幣への転化W-Gと貨幣の商品への再転化G-Wという対立しつつも相互補完的な2つの形式的な姿態変換として、あるいは、W-Gの販売過程とG-Wの購買過程という分離された2つの過程が統一されたものとして現れる。この交換の形態が2つの形式的な姿態変換すなわち販売と購買との統一であり、その過程がW-G-Wという転態過程を描いて循環する形式をとることは、すでに指摘したとおりである。だが、この過程において商品は貨幣と交換され、貨幣は商品と交換されるが、素材的にかんして見るならば、けっきょくは、商品は商品と交換されることになり、したがって、この過程はW-Wであって、これは、直接的な交換の場合と同一のものであり、社会的労働の物質代謝の過程であることには違いない。だが、この場合の交換が媒介された交換であることは、いっておかなければならない。

### Ⅲ 商品流通の展開

貨幣を媒介とする交換においては、その過程が

販売と購買という2つの過程に分離され、これによって、商品所有者は販売によって商品の価値を実現することができ、購買によってどのような使用価値をも入手することができる。だが、他面では、そこでは、販売W-Gは、他方では同時に購買G-Wであらねばならない、という新たな問題が生じる。すなわち、商品所有者からの販売は、貨幣所有者からの購買であらねばならず、したがって、1つの過程は2つの側面をもっている、といわなければならないのである。

このことが意味するところは、つぎのように表現しなければならない。すなわち、ある商品の循環W-G-Wにおける第1の姿態変換W-Gは、他の商品の循環における第2の姿態変換G-Wとつねに連関しなければならない、その商品の第1の姿態変換は、3番目の商品の循環における第2の姿態変換とつねに連関しなければならない、等々、諸商品のそれぞれの姿態変換は相互に密接不可分に結びついているから、他の諸商品のそれぞれの逆の姿態変換の対応が必要不可欠である。そればかりでなく、諸商品の姿態変換が描く諸循環の対応は連鎖的でなければならない。つまり、貨幣を媒介とする交換は、つねに他の交換を前提し、それとの絡みあいにおいてのみ存在することができ、個々の交換は、このようにしてえられる交換の絡みあいを離れては存在することができない。

かくして、貨幣を媒介とする交換においては、諸商品の販売と購買とはつねに相互に連鎖的に連関しあわなければならない。換言すると、それは、それぞれの諸商品の姿態変換が描く循環は、他の諸商品の諸循環とつねに解けないように絡みあわなければならないことである。あるいは、諸商品は自らの諸姿態変換をつねに相互に絡みあわせ交錯しあわねばならず、全体として1つの連鎖を形成しなければならないことである。あるいはまた、諸商品の個々の交換過程はつねに相互に絡みあった交換の連鎖体系を形成しなければならないことである。こうした諸商品の諸姿態変換が描く諸循環の相互の絡みあいの総過程あるいは総体として<sup>(13)</sup>観察された交換が商品流通である。

商品流通は、価値的には、その転態の運動の過程であるとともに、使用価値的には、その持ち手交替の運動の過程であることは、すでに明らかである。だが、商品流通について、なお明確にしな

ければならないことがある。それは、商品流通は、そこに組み込まれる諸当事者の絡みあいという相互作用によって自然発生的に現れながらも、諸当事者の主観的な個人的意志とはかかわることのない・彼らによって制御されることのない社会的な自然的関連・自然発生的な客観的な社会的過程として現れ、かつ、それが1つの全体圏となって発展する、ということである。だが、総じていえば、商品流通は、運動の過程であるが、その運動は社会的過程として現れる。

それだけではなく、商品流通においては、商品は貨幣と交換され、貨幣は商品と交換されるが、このような商品と貨幣との交換が無限に繰り返され、また、無限に繰り返されなければならないことから、同一の過程が不断に更新されることが、あるいは、商品と貨幣との交換=販売と、貨幣と商品との交換=購買との分裂が、商品流通の本質的な契機をなしている、ということができる。

ところで、商品流通が存在し機能するための必要かつ十分な条件は、商品と貨幣の存在であるが、両者は、貨幣が流通させるのは商品の交換価値であり、貨幣で表現された価値すなわち価格である、という相互関係にある。したがって、商品流通は、価格を措定することであり、商品に価格を転化させることであり、価格として商品を実現することである。それゆえ、商品流通の本質は、価格として措定された交換価値を流通させることである、と規定することができる。だが、そのためには、第1に、商品が交換価値として生産され価格としてあたえられていること、第2に、交換の範囲、交換の総和があつて、しかも、それが大なり小なり社会の全表面におよんで、交換行為の体制が存在すること、が基本的条件として必要である。

#### IV 商業の生成

貨幣の出現による交換の矛盾の克服の程度について考察する場合、商品の二重性の内実にもう1度立ち返る必要がある。商品の、使用価値であると同時に価値であるという二者対抗的性質が商品交換あるいは商品流通を可能とさせることは事実であり、また、使用価値と価値という商品の内在的対立が交換の矛盾を生み出すこと、貨幣の出現とその交換過程への介入によって交換の矛盾が克服されることもまた事実である。しかしながら、

貨幣が出現しても、商品の使用価値と価値という内在的対立は商品と貨幣とに外的に展開されたにすぎないのであって、交換の矛盾それ自体が根底から除去されたとはいえない。

貨幣を媒介とする交換の過程は販売と購買とに分裂した。だが、販売過程では商品もっぱら貨幣に転化されなければならないが、購買過程では貨幣はすぐに商品に転化されなくてもよい。したがって、販売過程は、商品にとって「命がけの飛躍」の過程である。販売過程のこの基本的性格は克服されざるものであり、商品が例外なく必然的につねに正常に貨幣と交換されるという保障はあたえられていない。そうであるかぎり、商品が販売されるかどうかは偶然的とならざるをえない。これが販売の偶然性である。販売の偶然性は、要するに、交換が販売と購買とに分裂することからのみ生じる、といってよい。

個別的交換における販売の偶然性は、商品流通においても、その形態を変えて現れる。商品流通は、販売と購買とからなる個々の交換の総和であり連鎖体系であることは、すでに論じたとおりである。その商品流通のなかで、ある個別的交換に販売の偶然性が発生して販売が行われないならば、それは、その個別的交換が完成されないことを示す。それだけではなくて、それは、その販売と対応すべき、他の個別的交換における購買が行われず、したがって、その個別的交換も完成されない、等々、個別的諸交換が連鎖的に未完成のまま終わるといふ結果をもたらす。このことは、ある個別的交換において発生する販売の偶然性は、本来ほとんど無限の過程として展開されるべき商品流通が自らの連鎖体系的なかばで切断され、交換連鎖の継続性が維持されえなくする。かくして、それぞれの商品の姿態変換が描く循環が他の諸商品の諸循環と解けないように絡みあうことができなくなる、という商品流通の矛盾<sup>(14)</sup>が発生する。

ここで、交換の矛盾、販売の偶然性および商品流通の矛盾のあいだにある継起的関係について総括するならば、つぎのようになる。すなわち、貨幣は、交換の矛盾を克服するものとして、交換を分割することによって交換を容易にするものとして出現した。だが、貨幣の出現が交換を容易にしたのは間違いのないことであるとしても、それは、交換を分割したうえでのことである。ところ

が、交換の分割それ自体が、つぎのような新たな矛盾を引き起こす。貨幣の出現は、交換を販売と購買とへ分裂させるとともに、販売の偶然性をもみちびき出し、販売と購買との不一致を生ぜしめる。それはまた、交換の連鎖体系において商品流通の矛盾を新たに生み出す。それゆえ、商品流通の矛盾は、交換の矛盾の展開された形態である、ということができよう。

ところで、商品流通は、商品生産に先行し、商品生産が行われる前提の1つとして現れる。それは、商品流通が交換を拡大し交換過程にますます多くの人間と労働生産物を引き入れることを可能とするからに他ならない。交換が商品生産全体をとらえ、それを規定するものとして、つまり、交換が商品生産の社会的連関の唯一の存立形態であるかぎり、商品生産にとっては、交換がなによりもまず必要であるばかりでなく、商品生産の増大化は交換の拡大を必要とする。それだけでなく、商品生産が行われる場合には、販売は不可欠な条件である。それにもかかわらず、不可欠な条件として現れる販売が行われるにあたって、個別的交換に販売の偶然性が現れ、したがってまた、商品流通にその矛盾が現れることは、商品流通を停滞させ、社会的労働の変換、社会的質料の変換を困難にさせるだけでなく、商品生産を維持し拡大するうえでも大きな障害となることは、明らかである。したがって、商品流通の矛盾は、必ず除去されるべき存在である。

このような販売の偶然性にもとづく商品流通の矛盾を克服し商品流通の疎通をはかる役割を果たすものとして現れたのが商人である。商人が商品流通に介在することによって、商品流通の矛盾はどのようにして克服されうるのか。商人は、生産者でもなく消費者でもない独立した第三者であり、もっぱら商品所有者と貨幣所有者とのあいだに介在して、彼らのあいだの売買形態の交換を組織的、継続的な独自の売買行為によって媒介する存在である。商人は、交換媒介の専門家として、商品所有者と貨幣所有者とのあいだの、時間的、場所的、個人的に分離した多数の販売と購買とを自らの手元に集中することができる。その結果、個別的に存在していた場合には中断されたはずの個々の販売と購買とが商人の手元で調整され結合されることが可能となり、販売と購買との不一致は解消さ

れることになる。かくして、商品流通の矛盾は克服されて、商品所有者と貨幣所有者とのあいだの個々の交換は、商人の独自の売買を媒介項として、相互に絡みあいつながりあうことになり、商品流通は疎通する。そればかりではなくて、商人の媒介的売買が連鎖となって、商品流通は無限に展開される可能性をあたえられる。しかしながら、商品流通の矛盾それ自体についていえば、商人の存在とその機能化によって、それが完全に解決されるわけではなくて、商品生産がより発展するもとは、この矛盾が新たな形態をとって展開することだけは、ここで指摘しておかなければならない。

商人の媒介的売買が個々の交換を連鎖的に絡みあわせつなぎあわせるものとなることによって、商品流通は、新たに、商品所有者と貨幣所有者とのあいだの個々の交換系列とそれを媒介する商人の媒介的売買系列とからなる総体として形成されるようになる。この総体としての商品流通のうち、商人の媒介的売買系列からなる商品流通の部分だけが商業である。あるいは、商業は、総体としての商品流通の全過程において、その1部分でありながら、他の部分とは異質的な、特殊な独自性をもつ1過程である、ということが出来る。

ところで、商人は個々の交換を媒介するのを基本的機能とするが、この基本的機能は、ある人から商品を購入し、それを他の人に販売することによって遂行される。これは、商人の活動が、ただ他人のために購買し販売するという媒介的売買を行うのみであることに尽きることを示している。つまり、商人の媒介的売買は、販売のための購買すなわち再販売購入という独自性をもっている、といわなければならない。それゆえ、商人の独自の売買は、購買G-Wと販売W-Gとの統一として、G-W-Gと表すことができる。したがって、商業は、かかる運動をおこなう商人の活動として、G-W-Gという運動を示す再販売購入であると規定しなければならない。

ところで、交換過程W-G-Wは、購買するための販売の過程であり、その出発点と帰着点とに現れるのは商品であって、そこでは貨幣は商品の流通を媒介するものとして機能するにすぎない。したがって、W-G-Wは、両極の質的差異がその内容の特徴であって、それは、質料的に異なる

使用価値の交換を目的とし、最終的にはW-Wに還元される、単純な商品流通である。これにたいして、商業の過程G-W-Gは、その出発点と帰着点とに現れるのは貨幣である、発展した商品流通の形態を示し、そこでは商品は貨幣の貨幣への生成を媒介する機能を果たすものとして現れるにすぎない。したがって、G-W-Gは、貨幣の獲得を唯一の目的とする過程である、といわないわけにはいかない。

もともと、流通は使用価値的側面と価値的側面とをもっているから、商業もまた両側面をもっていることは、いうまでもない。いま、商業の過程G-W-Gをこの両側面から考察することとし、使用価値的観点からまず始めることにする。過程の前半G-Wは、商人の購買が自らのための使用価値の獲得を目的とする過程ではなく、また、過程の後半W-Gは、商人の販売が自らのための使用価値を獲得するために行う購買を目指したものではない。それゆえ、G-W-Gは、単に商品所有者と貨幣所有者とのあいだの使用価値の持ち手交替の媒介を目的にしている。つぎに、価値的観点からすると、商人の購買G-Wは貨幣の商品への価値の転態を表し、販売W-Gは商品から貨幣への価値の転態を表す。かくして、G-W-Gは価値の転態過程であり、貨幣という一般的な姿態における価値の獲得を最終的な目的とする。

以上の考察から、商業は、商品と貨幣の実存、単純な商品流通の存在を必要かつ十分な条件として、販売の偶然性にもとづく商品流通の矛盾を克服する役割を果たすものとして自然発生的に生成した、生産者、消費者とは異質の独立した第三者である商人が組織的、継続的に行う独自の再販売購入であり、それは、交換のための交換が商品のための交換から分離<sup>(15)</sup>して形成されるものであって、そのかぎりにおいて、商業の領域は、総体としての商品流通の特殊な1過程に限られる、と規定することができる。また、商業の本質は、使用価値から解放されて価値の形態変換を行い、交換価値(価値)の媒介を行うこと<sup>(16)</sup>であり、商業の目的は、使用価値の移転に尽きることではなくて、交換価値(価値)の媒介をとおして使用価値を移転すること<sup>(17)</sup>であって、これを総括していえば、消費ではなく貨幣を獲得することであり、使用価値ではなく交換価値(価値)を獲得するこ

(18)

とである、と規定することができる。

しかしながら、ここでとりわけ注意しなくてはならないことは、つぎのことである。商業は、単に、交換価値の媒介を行い、商品を媒介にして貨幣を貨幣に生成させて、価値を獲得することだけが目的ではない、ということである。貨幣は商品の価値姿態であり、どの商品にも直接的に転化されうる素材的な富の一般的な代表であり、交換価値の自立化形態である。したがってまた、貨幣は流通の媒介者としてでなく、交換価値の唯一の十全な形態として、唯一の富として現れ、貨幣は致富欲の1つの対象であるばかりでなく、その対象そのものである。このことは、再販売購入が行われる流過程それ自体の諸関係から生じる社会的必然によって、貨幣が販売の自己目的となるばかりでなく、増加された貨幣が販売の自己目的となることを意味する。

それゆえ、商業は、自己の過程での交換価値を媒介することをつうじて、販売の自己目的である貨幣の単なる獲得に尽きるものではなくて、投下した貨幣よりもより多くの貨幣を獲得することこそがその窮極的・規定的な目的となる。したがって、商業の過程は、単に販売のための購買の過程  $G-W-G$  ではなく、より高価に販売するために購買する過程  $G-W-G'$  であり、貨幣が  $\Delta G$  という量的差異をもつ貨幣への生成の過程である。

$G-W-G'$  という過程は、 $G-W-G$  の単なる価値の姿態変換の過程ではないのはいままでもないことであって、それは、貨幣が自らの価値を増殖させる流通形式、流通の客観的内容である価値の増殖<sup>(19)</sup>を表す流通形式であり、それ自体の本質のなかに無限の反復が行われる可能性が含ま

れている。

ところで、価値増殖のために投下される価値は資本であり、資本は、必ず価値形態の転態を行う運動体であらねばならず、その運動の形式は必ず  $G-W-G'$  である。ところで、自己増殖する価値すなわち資本の形成について考察する場合、さきの諸考察から明らかのように、資本は商品と貨幣とがその基本的な前提であって、両者のあいだに交換がなければ、総じて使用価値が問題となるだけであって、価値増殖それ自体は存在しないし、資本の生産それ自体も存在しない。それは、流通過程に投下された貨幣が  $\Delta G$  を含む貨幣に生成し、それが資本の最初の現象形態であるからであり、したがって資本は流通において貨幣から転化したものであるからである。かくして、資本は、流通過程においてはじめて形成され、全経過の関連においてのみ、出発点が同時に帰着点として現れる  $G-W-G'$  においてはじめて現れる。それゆえ、 $G-W-G'$  は資本運動の内在的形態である。

ところが、この資本運動の内在的形態は、すでに明らかのように、商業の過程と同じ形式である。そうであるかぎり、商業は、商人の所有する財産から出発した資本すなわち商業資本の運動として行われることが理解されうる。それとともに、資本は、流通に由来するものとして、流通の所産として現れるから、単純な商品流通を前提として、商品生産と発展した商品流通すなわち商業が資本が発生する歴史的前提であり、商業資本は、事実上では、資本の、歴史的にもっとも古い自由な実存様式<sup>(20)</sup>であることから、商業の生成は、資本形成の原点であり、資本主義創生の出発点である、ということができる。

#### 注

- (1) K. Marx, F. Engels, *Gesamtausgabe*, Abt. 2, Bd. 1, *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, Tl. 1, Berlin, Dietz Verlag, 1976, S. 35, 資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス 資本論草稿集』、「1857-58年の経済学草稿」、大月書店、1981年、47-48ページ。
- (2) *Ebenda*, S. 35, 同上訳、47ページ。
- (3) 森下二次也編『商業経済論体系』、文人書房、昭和34年、8ページ。
- (4) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, Berlin, Dietz

Verlag, 1969, S. 372, 長谷部文雄訳『資本論』、第1巻、青木書店、1954年、585ページ。

- (5) *Ebenda*, S. 102, 同上訳、196ページ。
- (6) *Ebenda*, S. 103, 同上訳、197ページ。
- (7) 五十嵐喬『欧州商業史』、御茶の水書房、1972年、7ページ。
- (8) 森下二次也編、前掲書、9-10ページ。
- (9) K. Marx, *a. a. O.*, S. 101, 前掲訳、194ページ。
- (10) *Ebenda*, 同上訳。
- (11) 加藤義忠『現代流通経済の基礎理論』、同文館、

- 昭和61年、19ページ。
- (12) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf)*, Berlin, Dietz Verlag, 1953, S. 69, 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』、第1分冊、大月書店、1959年、72ページ。
- (13) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 126, 前掲訳、232ページ。
- (14) 森下二次也編、前掲書、13ページ。
- (15) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf)*, S. 111, 前掲訳、116ページ。
- (16) *Ebenda*, S. 407, 同上訳、444ページ。
- (17) 河野健二『西洋商業史』、日本評論新社、昭和31年、19ページ。
- (18) Marx, *a. a. O.*, S. 67, 前掲訳、70ページ。
- (19) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 167, 前掲訳、293ページ。
- (20) *Ebenda*, S. 337, 同上訳、461ページ。